ISSN 2188-7330

第2号
2014年
11月発行

ふみ

古典籍共同研究
事業センターニュース

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館
古典籍共同研究事業センター

CONTENTS

大型プロジェクト初年度の取り組み ……❶〜❸
共同研究「アジアの中の日本古典籍―医学・理学・農学書を中心として―」ワークショップ報告 国文学研究資料館研究部教授 陳捷 ……❹〜❻
コラム「鶴をさばく」 西村慎太郎 ……❼
平成26年度古典籍共同研究事業センター共同研究（公募型一般）の採択結果について ……❽

大型プロジェクト初年度の取り組み

国文学研究資料館副館長 寺島恒世

節目の年のスタート

昨年創立四十周年を迎えた国文学研究資料館は、本年度、人文社会科学分野で初めての「大規模学術フロンティア促進事業」として「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワークの構築計画」を本格的に開始することとなり、創立四十一年目は、さらなる飛躍を期してスタートするに相応しい年となりました。

今後十年間に及ぶ本事業計画は、本紙創刊号（二〇一四年六月）、また『リポート笠間』第五六号（二〇一四年五月）、『文藝年鑑２０１４』（二〇一四年六月）等の記事でご承知の通り、当館のこれまでの四十年史に照らしてもきわめて重い任務です。ここに、その取り組みのうち、当館教員の活動の一端をご紹介します。

教員の取り組み

a 体制整備

本事業計画は、新設された古典籍共同研究事業センター（以下「センター」と略称）を中心に、館を挙げて推進する文字通りの大型プロジェクトです。データベースを構築し、併せて国際共同研究ネットワー

国文学研究資料館副館長　寺島 恒世

クを構築するというこの大規模な計画を滞りなく進めるため、新たに従来の教員組織を包括する「センター連携委員会」を設けるとともに、情報系教員はセンター業務を兼ねるという体制の整備を図りました。

b 作業内容

センター連携委員会が取り組み始めたのは、計画の二つの柱の一つ、データベース構築事業において、検索機能を高度化させるための基礎作業です。具体的には、画像にタグを付す作業であり、構成員の専門領域から、初めに手がける分野を「文学」及び「歴史」とし、その基本方針や対象とする範囲を定めたのち、本作業に取りかかりました。

基本方針は、章題等の分節、挿画、本文の三区分を設けた上で、固有名詞を原則に抽出することとし、利用の便を考え、括弧付きで必要語彙を補う等の措置を講じました。

現在、対象とする範囲としての代表的な古典籍をほぼ選び終え、構成員各個に対象を定めて、タグを付す作業を行っています。その作業は作品ごとに有効性の判断を伴うため、外注やアルバイトよりも教員の担当がふさわしく、対象に即した個別の判断のもと、語彙を抽出する作業が着々と進んでいます。対象は、全分野とも基本的に全国各拠点から当館に集積される画像となりますが、集積は来年度以降に予定されているため、本年度は、当館所蔵の和古書画像を対象にしています。

情報系教員は、システム関係構築等の作業に関わっています。

c 今後の活動等

タグ付けは初めての試みゆえ、改善すべき点が生じた場合は見直すこととし、今後予定している他分野を含め、効率的な検索に資する作業を継続していく予定です。

なお、本事業計画に果たす教員の役割は、いま一つの柱である国際共同研究ネットワークの構築の面において、より強く発揮される計画となっており、本年度から始まった人間文化研究機構内で連携する共同研究では、既に複数のブランチにおいて積極的に活動を展開しています。

将来計画―事業の柱―

大学共同利用機関として、今後の国文学研究資料館はいかにあるべきか。

再来年度から始まる六年間の第三期中期目標・中期計

画期間に求められる機能強化のためには、主要なミッションとして、本事業計画の着実な遂行とその成果の発信が位置付けられることは明らかであり、当館では現在、創立以来精力的に進めてきた調査収集以下の諸事業及び共同研究等との関わり方をはじめ、あるべき将来像の検討を進めているところです。

国内外から多大な御協力・御支援をお願いすることによって成り立つ本事業計画を円滑に推進するため、館内教職員一丸となり、事業・研究の両面で力の限り任を果たし続けたいと考えています。

タグ付け作業のためのマニュアルを作成

共同研究「アジアの中の日本古典籍―医学・理学・農学書を中心として―」ワークショップ報告

国文学研究資料館研究部教授　陳　捷

「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」事業の実施にともない、①国際型、②公募型、③拠点主導型、④機構内連携型といった四つのカテゴリーに分けて、さまざまな共同研究も立ち上げることになりました。そのうちの「④機構内連携による共同研究」のひとつとして、平成26年度から平成29年度までの三年間において、国内外の医学・理学・農学書の研究者とともに、「アジアの中の日本古典籍―医学・理学・農学書を中心として―」をテーマとする共同研究を実施することになりました。

アジアの中の日本古典籍―医学・理学・農学書を中心として―

日本の古典籍は中国、朝鮮半島の文化を受け入れながら誕生し、その後も文化的接触によってさまざまな発展・変化を重ねてきました。そのため、アジアの書物文化に対する理解は日本古典籍の特質を把握する際において大変重要なこととなっています。しかしながら、近代以降の学問の細分化により、同時代・同分野の古典籍でさえも、著者の国・地域によって異なる学科や専門分野の研究対象になってしまうことがよく見られます。このことによって、アジアの書物文化の関係性の中において、認識すべき重要な事実が見逃されてしまうおそれがあり、古典籍研究の進展にとって大きな障碍となっています。また、国文学研究資料館はいままで文学書を中心として日本の古典

籍の調査・収集と研究を進めてきましたが、日本の古典籍の全体像を把握するためには、文学書以外の書物も含めたさまざまな分野の古典籍を総合的に研究することは、これからはますます重要になってくると思われます。

本共同研究は、このような趣旨で、日本古典籍において重要な分野であり、しかも現代の社会生活とも密接に関わっている医学・理学・農学書に焦点をあて、日本だけではなく、中国・韓国・琉球・ベトナムなどのアジア諸国の書物文化とも比較しながら、日本の古典籍の成立・流通・享受の問題について考える企画であります。

本プロジェクトでは、アジアを一つの大きな書物文化圏としてとらえ、実学書の中でもとりわけ社会生活へ与える影響が大きかった、医学・理学・農学書に注目することで、従来の古典籍研究の枠組みを越えた「総合書物学」へのアプローチを目指しています。

第1回ワークショップの開催

本研究の研究方法の特徴としては、医学・理学・農学書といったことなる研究分野の研究者による共同研究であり、また、日本古典籍の専門家のみではなく、中国・韓国・琉球・ベトナムなどの当該分野の専門家にも参加して頂き、共同調査・共同研究および国際ワークショップを通して、学際的・国際的な研究空間のなかで研究目標を達成することが挙げられます。それを実現するために、今年4月に始まって以来、数回の打合せを重ね、具体的な研究目標・研究方法などについて意見交換を行い、8月23日(土)・24日(日)に、第1回ワークショップを開催しました。

一日目、冒頭、今西館長の挨拶に続き、谷川副館長から「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」についての具体的な説明がなされ、事業全体における本共同研究の位置付けについても紹介がありました。

最初の発表は、茨城大学人文学部教授の真柳誠氏による「日中韓越の医学書流通と受容：その内容と形態」です。日本で、江戸前期の1651～1660年をピークに漢籍医書の流行があったことの分析など、台北故宮博物院・ベトナム国家図書館・ソウル大学奎章閣について全所蔵古医籍の調査を終え、さらに調査を継

共同研究「アジアの中の日本古典籍
—医学・理学・農学書を中心として—」
ワークショップ報告

国文学研究資料館研究部教授　陳　捷

続中の発表者ならではの幅広い経験と知識に基づく興味深い発表でした。参考として、日本・中国・韓国・ベトナムの医学書版本や写本の資料も回覧され、参加者にとっては、それぞれの国における医学書の特徴を自分の目で確かめることができる貴重な機会になったことと思います。

二番目の発表は、東海大学名誉教授である渡部武氏による「日本における中国農学書受容の諸問題」です。『斉民要術』の位置づけや、王禎『農書』各版本における農器具の挿絵の変化等について、丁寧な解説がありました。質問も多数出され、参加者の関心の強さが感じられました。

二日目には、中国中医薬大学教授の梁永宣氏による「朝鮮通信使資料から見た日・韓の医学知識の交流」、日本女子大学文学部教授の福田安典氏による「文学作品に利用された医学書・本草学書の研究—洒落本を例に—」、東京大学人文社会研究科教授の川原秀城氏による「梅文鼎と西洋天文・数学知識の日本への伝入」、鹿児島大学法学部教授の高津孝氏による「琉球・薩摩の博物学の研究」、計四本の発表が行われ、それぞれの専門分野から、近世における日本、中国、朝鮮、琉球の医学・本草学・数学などの知識およびその普及の状況を考察し、また、互いに交流・影響する史実についての考究やその意義の分析も行われました。

二日間の発表はいずれもより広い視野で問題を捉えようとして、国・地域や専門分野の制限を乗り越えようとする新しい研究方向を示しており、参加者にとってたいへん興味深い内容でした。総合討論の時間は、活発な意見交換がなされ、とくに、若い世代の期待と意欲が強く感じられたことが印象に残っています。

真柳 誠 氏

渡部 武 氏

次回は、12月13日～14日に長野仁氏（森ノ宮医療学園専門学校・はりきゅうミュージアム 研究員）による「今世紀に出現した日本鍼灸の新史料—日本鍼灸史の再構築に向けた史料蒐集—」、平野恵氏（台東区立中央図書館郷土資料調査室 専門員）による「19世紀本草学の系譜　園芸と物産学の視点から」の発表を中心に研究会を行う予定です。

今回のワークショップの成果を次へ繋げ、より充実した共同研究を進めていきたいと考えています。

コラム

鶴をさばく

国文学研究資料館 准教授
西村　慎太郎

読者の皆さんの中に鶴を食べたことがある方は正直に手を挙げて頂きたい。おそらく一人もいないと思われるが、もし手を挙げた方は誰も見ていないうちにそっと手を下げることをお勧めする。なぜなら日本において鶴（正確にはツル目ツル科の鳥類）はすべて天然記念物に指定されており、食用はおろか捕獲も制限されている。もちろんむやみに捕獲したら罰せられてしまう。

しかし、以前、日本には多くの鶴が生息していた。例えば、歌川広重の浮世絵『東海道五拾三次』の原宿（現在の静岡県沼津市）にも原っぱで休む二羽の鶴が描かれているように、鶴を見かけることは日常的であったのであろう。そして、その鶴は現在と同じように「めでたい」動物として珍重され、高貴な方がたへの献上品として利用された。豊臣秀吉以降、江戸時代の徳川将軍家は毎年京都の天皇に鶴を献上している。では、献上した鶴はどうしたか、ペットとして利用されたのだろうか。ペットだとしたら「鶴は千年」、たちまち京都は鶴だらけになってしまう（なお、本当の鶴の寿命は三〇年程度）。実は献上された鶴は食べるのである。

写真は国文学研究資料館蔵の『千羽鶴折形』という折り紙で鶴を作るための書物の一部である。装束を着て、右手に長い庖丁、左手に長い箸を持って腰を下ろし、まな板の上には鶴。「まな板の上の鯉」ならぬ「まな板の上の鶴」である。献上された鶴は、鶴をさばく専門の公家によって毎年正月一七日に天皇や公家をはじめ、チケットを入手した京都内外の人びとが見守る中、特設ステージが京都御所の中に設置されて、さばかれた。これは鶴庖丁という儀式で、江戸時代には御厨子所預という職を務めた高橋家が代々務めた。この高橋家、百人一首などで著名な歌人・紀貫之の一族である。紙と筆で歌を詠んでいたその手は、時の河を越えて箸と庖丁に変ったのであった。

もちろんまな板の上の鶴はすでに息絶えている。ステージの上でバタバタされたら一大事だ。鶴庖丁における解体ショーは次のようなものである。最初に胴体を切る。次に左右の羽を切る。次に鶴の首を三つに切り分け、胴体を上下に切り分ける。最後に足を切り落として、鶴の解体ショーはおしまいだ。

ところで、多くのオーディエンスが見守るステージの上、鶴をさばく公家も大変である。高橋家の古文書は慶応義塾大学図書館に所蔵されていて、高橋家代々の日記が遺されているので、そこからいくつか逸話を紹介しよう。

天和二年（一六八二）の鶴庖丁、高橋家の当主（本人のプライバシーのため本名は記さない）、庖丁で右の親指を切ってしまった。当時の宮中で血は「ケガレ」とされて御法度、ましてや儀式中で、しかも食材の解体ショーの儀式だ。しかし、当の本人は「鶴庖丁の終わりの方だし、少しだから問題ない」と開き直って日記に記している。

また、江戸時代の中ば以降は高橋家とともに御厨子所小預の大隅家という公家も鶴庖丁を務めることがあったが、この大隅家の江戸時代後期の当主（本人のプライバシーのため本名は記さない）、極度の緊張のためかリハーサルでまともにさばくことができず、茫然自失、夫の晴れ舞台を期待していた妻はリハーサルを目の当たりにして泣き出してしまった。そして、本番を直前に控え、やむを得ず高橋家の当主が夜なべをしてさばきやすいように切り込みを入れる始末であった。逸話はまだまだあるが、詳しくは拙著『宮中のシェフ、鶴をさばく』（吉川弘文館歴史文化ライブラリー ISBN:9784642057448）を参照されたい。

『千羽鶴折形』より
国文学研究資料館蔵 請求番号：Y1472-001

平成26年度古典籍共同研究事業センター共同研究（公募型一般）の採択結果について

今年度公募いたしました共同研究が、次のとおり決定いたしました。

◆募集内容

［募集対象］日本の古典籍に関する研究、または、日本の古典籍に基きそれを活用してなされる研究で、これまで未開拓であったか、あるいは十分に展開されてこなかった研究領域に取り組む意欲的な共同研究。

［研究期間］平成26（2014）年10月～平成29（2017）年9月の3年間

◆応募状況（採択予定件数5件）

応募件数：19件
採択件数：5件

◆採択課題（申請受付順。［］内は研究代表者）

○草双紙を中心とした近世挿絵史の構築［佐藤悟（実践女子大学文学部　教授）］

○近世日本を中心とする東アジアの理学典籍に関する国際共同研究［小川束（四日市大学環境情報学部　教授）］

○紀州地域に存する古典籍およびその関連資料・文化資源の基礎的研究［大橋直義（和歌山大学教育学部　准教授）］

○近世日本科学史典籍の国際的再評価に向けた基盤研究［研究代表者：佐藤賢二（電気通信大学大学院情報理工学研究科　准教授）］

○日本漢詩文における古典形成の研究ならびに研究環境のグローバル化に対応した日本漢文学の通史の検討［合山林太郎（大阪大学大学院文学研究科（コミュニケーションデザイン・センター）准教授）］

ふみ 第3号は、平成27（2015）年2月発行予定です。

ふみ
古典籍共同研究事業センターニューズ
第2号

〈発行日〉
2014（平成26）年11月30日
〈編集・発行〉
国文学研究資料館
古典籍共同研究事業センター
〒190-0014
東京都立川市緑町10-3
TEL　050-5533-2988
FAX　042-526-8883
https://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/